

令和4年度 全国学力・学習状況調査の結果と分析について

1 調査の概要と目的

令和4年4月、令和4年度全国学力・学習状況調査が、全国の小学校6年生と中学校3年生を対象に実施されました。この調査は、これまでの教育活動や教育施策の成果と課題等を把握・検証し、今後の教育活動に生かすことを目的としています。

なお、本調査で測定できるのは学力の特定の一部であること、学校における教育活動の一側面であることが、国の調査実施要領で謳われています。

2 実施状況

(1) 調査実施日 令和4年4月19日(火)

(2) 実施項目

ア 児童生徒に対する調査

(ア) 教科に関する調査 (小学校：国語、算数、理科 中学校：国語、数学、理科)

① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等に関する内容

② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関する内容

(イ) 質問紙調査

調査する学年の児童生徒を対象に、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

イ 学校に対する質問紙調査

学校を対象に、指導方法に関する取組や学校における人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査

(3) 実施校数 小学校 35校 中学校 19校

(4) 実施人数 (単位：人)

	国語	算数・数学	理科	質問紙
小学校6年生	3,642	3,646	3,644	3,637
中学校3年生	3,324	3,323	3,321	3,323

3 平均正答率一覧表

(1) 藤沢市立小学校平均正答率 (単位：%)

	国語	算数	理科
全国 (公立)	6.6	6.3	6.3
神奈川県 (公立)	6.5	6.4	6.3
藤沢市 (公立)	6.2	6.3	6.2

(2) 藤沢市立中学校平均正答率 (単位：%)

	国語	数学	理科
全国 (公立)	6.9	5.1	4.9
神奈川県 (公立)	6.9	5.3	5.0
藤沢市 (公立)	7.1	5.4	5.1

※ 全国平均正答率は、国から提供されたデータの小数点第一位を四捨五入した数値である。

※ 国立教育政策研究所の令和4年度全国学力・学習状況調査報告書には、「全ての都道府県(公立学校)が全国平均正答率の±10%の範囲内であり、大きな差は見られない。」と表記されている。

4 教科に関する調査結果の概要

教科に関する調査結果の特徴は「おおむね理解していると思われる内容」と「課題があるとみられる内容」で構成しています。これらは次の3点のうちいずれか1つまたは複数に該当する内容を取り上げているものです。

- ① 本市の正答率に着目して、特に取り上げてさらなる向上を目指すべき内容である、または、課題となる点としてとらえ、授業や指導法の改善から学力の向上を図る内容
- ② 本市の解答率に着目して、解答ができなかった割合（無解答率）が取り立てて高いと思われる内容
- ③ 国立教育政策研究所の調査報告書の表記から、公立学校と全国の平均正答率について、±10%の範囲内は大きな差ではないという見解をもとに、正答率が±10%の範囲外となる内容

上記の3点を踏まえ、全体の結果を見ると、おおむね理解している傾向にある内容は次のとおりです。

[国語] 「事象や行為、心情に関わる語句を使うこと」「自分が聞きたいこと等の中心を捉える」といった、語句の意味を的確に理解したり、自分が聞きたいことを的確に質問をしたりする内容

[算数・数学] 「図形の意味や性質、構成の仕方を理解すること」「数や式、関数の意味を理解したり明確に捉えたりすること」といった数や式、図形等に関する内容

[理科] 「問題解決の筋道を構想し、観察で得た結果や調べたことから自分の考えをもつこと」「実験の計画、結果の記録をすること」といった問題解決のために考察することや実験、観察等を行うといった内容

一方で、自分自身の言葉で思いや考えを表現したり説明したりする内容や、数量を処理しデータをもとに考察し説明する内容などに課題があるとみられます。また、記述問題の無解答の多さなども挙げられます。

これら課題に対して改善する手立てを検討し、取り組む必要があります。

※各教科の詳細は「5 各教科に関する調査結果の特徴と授業改善のポイント」において、「おおむね理解しているとみられる内容」「課題があるとみられる内容」「課題に対する改善の手立て」の順に記載しています。

5 教科に関する調査結果の特徴と授業改善のポイント

【小学校 国語】

<おおむね理解しているとみられる内容>

□話し言葉と書き言葉との違いを理解する

□必要なことを質問し、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの内容の中心を捉える

<課題があるとみられる内容>

■漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くこと

■学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うこと

■文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること

<課題に対する改善の手立て>

○漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くためには、実際の授業中での言葉かけが大切です。画数の多い文字ほど大きく書き、画数の少ない文字ほど小さく書くと、並べたときに読みやすい文字列になります。行の中心や行の間、文字と文字の間など一文字一文字を整えることに加え、文字の集まりという面からも整えることが重要です。また、相手にとって読みやすいかという意識付けも必要です。問題にもあったように手紙を書く場面を設定するなど、漢字や仮名の大きさや配列に注意して書く場面を設定すると効果的です。他にも、毛筆で学習したことを日常生活で生かすことを意識できるような指導も大切です。

○漢字の指導に当たっては、日常生活の中で適切に使うようにすることが重要です。そのためには読み方や字形に注意して繰り返し練習することにとどまらず、同じ音で読む漢字を集めたり、似た形の漢字を集めたりすることや、辞書タブレット端末を日常的に利用して学習することを習慣付け、語彙を広げながら適切に漢字を表記できるように指導することが大切です。

○自分の文章のよいところを見付けていくためには、伝え合う経験を積み重ねていくことが大切です。ペア学習やグループ学習の中で、自分が書いた目的や意図を相手に伝えたり、感想や意見を具体的に伝え合ったりすることが効果的です。さらに、互いの文章を読み合うことで、言葉の選び方や書き方の工夫を認め合い、自分の表現に生かそうとすることも大切です。

◇全体的な傾向として無解答の多さが目立ちました。取り組んだことのない問題や難しいと感じる問題に出合ったときには、児童自らが考え、答えを導き出せるようにするために、今まで学習した経験を活用できるような課題解決学習や問題解決学習などの機会を増やすことが大切です。また、ICTを活用した学習を取り入れ、思考ツールなどを使って考えを整理する経験も効果的です。

【小学校 算数】

<おおむね理解しているとみられる内容>

- 被乗数に空位のある整数の乗法の計算をすることができる（数と計算）
- 百分率で表された割合を分数で表すこと（変化と関係）
- 図形を構成する要素に着目して、長方形の意味や性質、構成の仕方について理解している（図形）

<課題があるとみられる内容>

- 目的に合った数の処理の仕方を考察すること（数と計算）
- 数量が変わっても割合は変わらないことを理解すること（変化と関係）
- 伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて、未知の数量の求め方と答えを式や言葉を用いて記述すること（変化と関係）

<課題に対する改善の手立て>

○目的に合った数の処理の仕方を考えることができるようにすることが重要です。指導に当たっては、例えば、ある2つの数の積を概数にして計算した結果と、実際の数の積との大小関係について話し合う活動等が考えられます。その際には、概数にする方法である切り上げ、切り捨て、四捨五入を用いて計算し、どの方法が適切であるかを判断できるようにすることが大切です。

○日常の具体的な場面に対応させながら、割合について理解できるようにすることが重要です。指導に当たっては、例えば、果汁が含まれている飲み物をいくつかに分けても、飲み物の濃さは変わらないという生活経験を想起しながら、飲み物の量に対する果汁の量は変わらないと判断する活動が考えられます。その際には、生活経験を基にした判断と、計算で求めた結果を関連付けて考えるようにすることが大切です。

○伴って変わる二つの数量に関係に着目し、未知の数量を求めることができるようにすることが重要です。指導に当たっては、例えば、伴って変わる二つの数量のデータを何組か集めて表に整理し、比例の関係を見いだす活動が考えられます。その際、一方の数量のみに着目するのではなく、二つの数量がどのように変わっているかに着目し、比例の関係を捉え、未知の数量を求められるようにすることが大切です。

また、割合については、百分率で表された割合を分数で表すことなどについて、おおむね理解されているとみられる一方で、「図や表」、「数や式」を相互に関連付けて、日常の具体的な場面に対応させて割合を捉えさせることが重要です。

【小学校 理科】

＜おおむね理解しているとみられる内容＞

- 問題を解決するために必要な観察の視点を基に、問題を解決するまでの道筋を構想し、自分の考えをもつこと
- 観察で得た結果を、問題の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもつこと

＜課題があるとみられる内容＞

- メスシリンダーという器具を理解している
- 日光は直進することを理解している
- 実験で得た結果を、問題の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもち、その内容を記述できる

＜課題に対する改善の手立て＞

- 目的に応じて器具や機器を選択し、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けることができるようにするためには、どの器具や機器を使用するとよいかについて操作の手順と併せて考えることができるようにすることが重要です。指導に当たっては、多くの器具の中で、目的に合う器具を選択するために、その役割や使い方を確認するとともに、実際に操作を体験することが大切です。また、目的に応じた器具を選択することの重要性や、一つひとつの操作の理由について話し合い、確かめ合う学習活動が考えられます。
- 知識をより深く理解できるようにするためには、主体的な問題解決を通して知識を習得できるようにすることや、習得した知識を実際の自然の事物・現象と関連付けて説明できるようにすることが重要です。指導に当たっては、生きて働く知識を習得するために、主体的な問題解決を通して、知識を概念的に理解することが大切です。また、習得した知識を、学習や生活などに生かすことができるような課題を設定し、既習内容を活用しながら自分の考えを説明する学習活動が考えられます。
- 観察、実験などで得た結果について分析して、解釈し、より妥当な考えをつくりだすことができるようにするためには、結果を事実として分析して、解釈し、それを結論の根拠として表現できるようにすることが重要です。指導に当たっては、結果の具体的な数値や、それを分析した内容などを根拠として表現する場面を設定することが大切です。また、問題に対するまとめを行う際に、結果を具体的な数値として学級やグループ内で共有し、何を結論の根拠としているのかを明らかにし、より妥当な考えをつくりだす学習活動が考えられます。

【中学校 国語】

＜おおむね理解しているとみられる内容＞

- 事象や行為、心情を表す語句について理解すること
- 助動詞の働きについて理解し、目的に応じて使うこと
- 文脈に即して漢字を正しく書くこと

＜課題があるとみられる内容＞

- 自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫して話すこと
- 自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くこと
- 表現の技法について理解すること

＜課題に対する改善の手立て＞

○自分の考えが分かりやすく伝わるように話すためには、聞き手に応じた語句を選択したり、話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方、言葉遣いなどに注意したりするなどして、表現を工夫することが大切です。指導に当たっては、ICT 機器を活用してスピーチの様子を動画で記録し、話し方を振り返ったり、工夫したことの効果を確認したりするなどの学習活動を通して、音声的特質が多様な声を作り出し、話したり聞いたりする活動に影響していることを認識することが重要です。

○自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くためには、自分の考えが確かな事実や事柄に基づいたものであるかを確認することが必要です。その上で、自分の思いや考えを繰り返すだけではなく、根拠を文章の中に記述する必要があることを理解して書くことが重要です。根拠を記述するに当たっては、根拠となる複数の事例や専門的な立場からの知見を引用することなどが考えられます。

○表現の技法については、「比喩（直喩、隠喩、擬人法など）」、「反復」、「倒置」、「体言止め」などの名称で呼ばれている表現の技法をその意味や用法と結び付けて理解し、話や文章の中で使うことが必要です。指導に当たっては、表現の技法が用いられている文を、表現の技法を使わない文に書き換え、両者を比較することを通して、表現の技法の効果を確認する学習活動などが考えられます。

◇上記以外の正答率の高くなかったものとして、「行書」の問題がありました。書写の学習の際などに意識して指導に当たることが大切です。また、全体的な傾向としては、漢字など語句に関する知識・技能は身につけています。その上で、自分の考えが分かりやすく伝わるように話したり書いたりする力を育むためには、聞き手や読み手を意識し、必要に応じて ICT 機器を活用するなどして、国語科以外の教科や道徳科、学級会活動など教育課程全般にわたって、協働した学習活動を展開することが効果的です。

【中学校 数学】

<おおむね理解しているとみられる内容>

- 多数の観察や多数回の試行によって得られる確率の意味を理解すること（データの活用）
- 問題場面における考察の対象を明確に捉えること（数と式）
- 証明の根拠として用いられる三角形の合同条件を理解していること（図形）

<課題があるとみられる内容>

- 結論が成り立つための前提を考え、新たな事柄を見だし、説明することができること（数と式）
- 箱ひげ図から分布の特徴を読み取ること（データの活用）
- 事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明すること（関数）

<課題に対する改善の手立て>

- 数学の事象から問題を見だし、数学的な推論などによって問題を解決し、解決の過程や結果を振り返って、数量や図形などの性質を見だし統一的・発展的に考察することができるようになることが大切です。指導にあたっては、「同じ2つの偶数の和は、4の倍数になる。」の前提を変えて、「異なる2つの偶数の和の場合も、4の倍数になるのではないか。」と予想し、その予想に対して、具体例をあげて調べたり、既に正しいと認めた文字式を用いた説明を読んで考えたりする場面を設定することが考えられます。さらに、「4の倍数になる」が成り立つための前提条件を、2つの偶数の和を表す式が「 $4 \times (\text{整数})$ 」の形に変形できれば良いという見通しをもって調べる活動を取り入れることも考えられます。
- 箱ひげ図は、複数のデータを比較するとき視覚的に比較がしやすい統計的な表現である一方、分布などの失われる情報もあるため、必要に応じて箱ひげ図とヒストグラムを関連付けて用いることが大切です。指導にあたっては、複数の集団のデータの分布に着目し、その傾向を比較して読み取る活動を通して、四分位数や箱ひげ図の必要性と意味を理解できるようにすることが考えられます。
- 様々な問題に対して数学を活用して解決できるようにする際に、問題解決に焦点を当て、表・式・グラフなどの「用いるもの」と、それらを問題解決するためにどう用いたかといった「用い方」について考え、説明できるように指導することが大切です。指導にあたっては、問題解決の過程を振り返る場面において、解決の見通しをもつ場面で出された「グラフを使って求める」や「 $y = 300$ を代入する」などという不十分な表現を取り上げて吟味するなど、より洗練された表現に高めていく工夫が考えられます。
- ◇全体としては、事柄が成り立つ理由を説明する問題において正答率が低く、無解答率が高い傾向にありました。指導にあたっては、数学的な表現を用いながら他者に説明するような場面を意図的に設け、表・式・グラフを適切に選択したり、自分の表現を他者の表現と比較したりするような、事象の考察を深める体験をできるようにすることが大切です。

【中学校 理科】

＜おおむね理解しているとみられる内容＞

- モデルを使った実験において、変える条件と変えない条件を制御した実験を計画できる
- 化学変化に関する知識及び技能を活用して、水素の燃焼を分子のモデルで表した図を基に化学反応式で表すことができる
- 節足動物の外部形態の観察結果と調べた内容を、生活場所や移動の仕方と関連付けて、体のつくりと働きを分析して解釈できる

＜課題があるとみられる内容＞

- 飛行機雲の残り方を科学的に探究する学習場面において、地上の観測データを用いて考察を行った他者の考えについて、多面的、総合的に検討して改善できる
- 化学変化に関する知識及び技能と「エネルギー」を柱とする領域の知識及び技能を関連付け、水素を燃料として使うしくみの例の全体を働かせるおおもとして必要なものを分析して解釈できる
- 力の働きに関する知識及び技能を活用して、物体に働く重力とつり合う力を矢印で表し、その力を説明できる

＜課題に対する改善の手立て＞

- 自然の事物・現象を科学的に探究する上で、自分や他者の考察について根拠が妥当か、多面的、総合的に検討して改善することが大切です。指導に当たっては、本問のように、他者の考察の根拠としている観測データの種類や科学的に探究する方法が妥当か検討する学習場面を設定することが考えられます。その際、用いた観測データが自然の事物・現象と対応しているか、観測データの読み取りが適切であるかなどの視点を明示することが重要です。
- 身近な現象を科学的に探究する上で、化学変化と「エネルギー」を柱とする領域の知識及び技能を関連付け、分析して解釈することが大切です。指導に当たっては、水の電気分解や水素の燃焼などの化学変化には、電気、熱、光など「エネルギー」を柱とする領域が関連していることに気付くようにすることが考えられます。その際、化学変化を起こすきっかけとなるエネルギーの形態だけでなく、それらが生み出される過程について触れることも重要です。
- 力の働きについて科学的に探究する上で、力は大きさと向きによって表されることや物体に働く2力のつり合いなど、目に見えない力を矢印で表して説明することが大切です。指導に当たっては、物体に力を働かせる実験を行い、一つの物体に二つの力が働いていることに気付くようにし、それらの力の大きさや向きを矢印で表して、つり合いの関係を説明する学習場面を設定することが考えられます。

6 児童生徒質問紙調査に関する調査結果の特徴と改善のポイント

- ※ 児童生徒質問紙にある質問項目のうち、本市の児童生徒の学力と関連のある質問項目について取り上げています。
- ※ 児童は「小学生」、生徒は「中学生」を表しています。
- ※ 時間数や頻度等を問う設問を除いて、「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」と回答した割合を合計しています。

(1) 特徴及び改善のポイント

① 基本的な生活習慣 等

質問項目	小学校		中学校	
	藤沢市	全国	藤沢市	全国
朝食を毎日食べている	95.7%	94.4%	93.1%	91.9%
就寝時刻が毎日ほぼ同じである	81.4%	81.5%	77.7%	79.9%
起床時刻が毎日ほぼ同じである	89.9%	90.4%	90.0%	92.2%
平日、一日どのくらいの時間、携帯電話やスマートフォンで SNS や動画視聴をするか	4時間以上	10.5%	10.9%	16.9%
	3時間～4時間	9.3%	8.8%	14.8%
	2時間～3時間	13.3%	12.8%	22.1%

「朝食の摂取率、就寝・起床の時刻」についてはおおむね身についています。「平日の携帯電話やスマートフォンで SNS や動画視聴」をする時間については、児童生徒ともに「2時間～3時間」が最も高い割合となりました。また、4時間以上の視聴についても10%以上の割合を占めていることから、携帯電話やスマートフォン等の使用時間について児童生徒自身が考えられるような働きかけが必要です。

② 挑戦心・自己有用感等、地域や社会に関わる活動の状況等

質問項目	小学校		中学校	
	藤沢市	全国	藤沢市	全国
自分には、よいところがある	79.1%	79.3%	75.2%	78.5%
難しいことでも失敗を恐れずに挑戦する	69.8%	72.5%	62.2%	67.1%
人の役に立つ人間になりたいと思う	94.9%	95.1%	93.0%	95.0%
今住んでいる地域の行事に参加している	46.5%	52.7%	32.0%	40.0%

「自己有用感等」については、「自分によいところがある」と回答した児童生徒は、ともに75%を超えています。また、「人の役に立つ人間になりたい」と回答した児童生徒は93%を超えています。

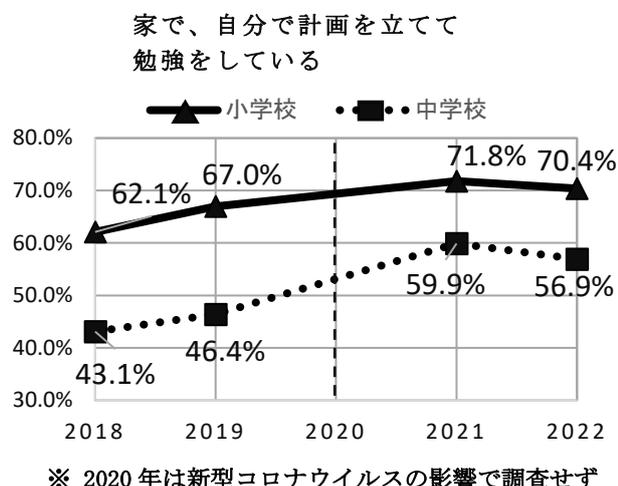
「難しいことでも失敗を恐れずに挑戦する」と回答した児童生徒は、ともに60%から70%の範囲の割合となっています。各教科の平均正答率を比較すると、挑戦心の質問に「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率は、「当てはまる」など他の回答と比べて低い割合となっていることがわかりました。児童生徒が難しい課題でも失敗を恐れずに取り組み、意欲をもって学習や生活に臨めるように働きかけることが大切です。

「地域の行事への参加」については、小学校において46.5%、中学校で32.0%となっています。新型コロナウイルス感染拡大の影響により各種行事の中止は現在もあることが影響していると推察されるとともに、部活動や塾などにより参加しにくい状況

であることが考えられます。学校での郷土、地域に関する学習や家庭での参加を促すような声かけといった働きかけを行ったり、日程調整を工夫したりするなど、活性化へ向けた取り組みが望まれます。

③学習習慣・学習環境等

質問項目		小学校		中学校	
		藤沢市	全国	藤沢市	全国
家で、自分で計画を立てて勉強をしている		70.4%	71.1%	56.9%	58.5%
平日に学校以外で、一日にどのくらいの時間勉強するか	2時間以上	30.3%	25.1%	49.7%	35.2%
	1～2時間	24.7%	34.3%	24.7%	34.3%
	30分～1時間	24.9%	25.8%	13.0%	17.0%
	30分より少ないか全くしない	19.9%	14.7%	12.5%	13.4%
読書は好きである		72.3%	73.1%	66.4%	68.2%



「家で、自分で計画を立てて勉強をしている」の割合は、児童生徒とも2021年度から微減となっているものの、2019年、2018年の数値と比較すると高い数値を保っていることがわかります。これは、新型コロナウイルス感染症拡大により登校できない期間、家庭において勉強する機会が増えたことの影響が背景にあるものと推察されます。一方で、「平日に学校以外で勉強する時間」が30分未満の割合は小学校19.9%、中学校12.5%となっています。

このことから、基礎学力の定着という観点において、学校での学習だけでなく、予習・復習などの家庭学習について、自ら計画的に取り組んでいけるよう指導を行っていくことが大切です。

「読書は好きである」の質問項目については、「読書が好き」と回答した割合は小学校72.3%、中学校66.4%となっており、小学校より中学校の方が5.9ポイント減となっています。

また、「読書は好きである」の回答と国語科調査の平均正答率との関係を見ると、「あてはまる」と回答した児童の国語科平均正答率は70.2%、生徒は76.9%に対して、「あてはまらない」と回答した児童は50.2%、生徒は60.8%となっており、「読書は好きである」の回答と国語科調査の正答率には相関関係があることがわかり、読書活動は国語の力を身に付ける一助となっていることが推察されます。本に関心を持ち、読書を好む児童生徒が増えるよう、学年に応じた読書活動を取り入れることが効果的だと言えます。

「読書は好きである」の回答と国語科調査の正答率との関係

質問項目・回答		国語科平均正答率	
		小学校	中学校
読書は好きである	「あてはまる」	70.2%	76.9%
	「どちらかという とあてはまる」	59.8%	70.8%
	「どちらかという とあてはまらない」	53.0%	67.7%
	「あてはまらない」	50.2%	60.8%

④ICT を活用した学習状況

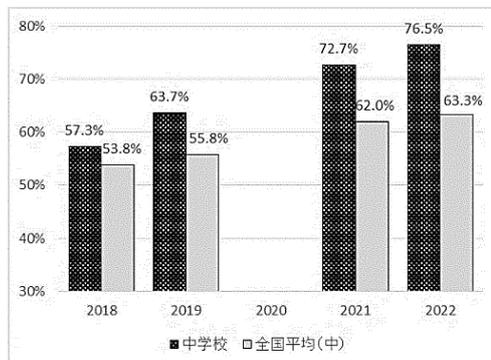
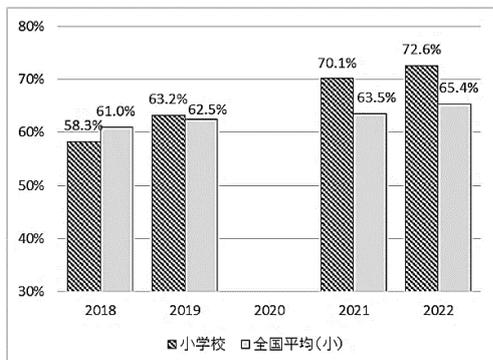
質問項目		小学校			中学校		
		藤沢市		全国	藤沢市		全国
		2022年	昨年度		2022年	昨年度	
授業でコンピュータなどのICT機器をどの程度使用したか	ほぼ毎日	28.5%	10.4%	26.7%	16.6%	12.0%	21.6%
	週1回以上	55.4%	22.9%	56.5%	67.5%	46.4%	59.0%
	月1回以上	11.8%	39.1%	11.5%	13.2%	29.3%	14.2%
	月1回未満	4.1%	27.2%	5.1%	2.6%	12.0%	5.0%
学習の中でコンピュータなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つ		94.1%	93.3%	94.4%	93.6%	91.5%	92.6%

ICT機器の使用頻度については「ほぼ毎日」が小学校28.5%、中学校16.6%、「週1回以上」が小学校55.4%、中学校67.5%の割合を占めています。また、ICT機器の活用が勉強の役に立つと考える児童生徒の割合は93%超となっています。これらの数値は、いずれも昨年度より高く、学校においてICT機器を活用した学習が定着につながっている傾向にあると思われます。

⑤主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善及び総合的な学習の時間・学級活動

	質問項目	小学校		中学校	
		藤沢市	全国	藤沢市	全国
主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善	課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた	79.5%	77.3%	78.7%	79.2%
	自分の考えを発表する機会では、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表した	72.6%	65.4%	76.5%	63.3%
	級友との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができた	79.6%	80.1%	74.5%	78.7%
総合的な学習の時間・学級活動	総合的な学習の時間では課題を立て、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる	62.1%	72.7%	69.9%	72.1%
	学級生活をよりよくするために、学級活動で話し合い、互いの意見を生かして解決方法を決めている	63.8%	73.5%	73.0%	76.8%

質問項目「自分の考えを発表する機会では、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表した」の各年の回答割合



※ 2020年は新型コロナウイルスの影響で調査せず

「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」に関する項目について、いずれも小・中学校ともに70%から80%の範囲を占めています。特に「資料や文章、話の

組立てなどを工夫して発表する」項目については、各年の回答割合をみると、小・中学校ともに平成30年の50%台から毎年数値が向上しており、今年は72%以上を示していることがわかります。また、「学校に対する質問紙調査（学校質問紙調査）」における、児童生徒の発表に関する質問項目への回答も高い数値を示しており、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に取り組んでいる日頃の成果が学校全体で感じ取れていると考察することができます。

一方で、「総合的な学習の時間の課題を立て、調べたことを発表する学習活動」、「学級会活動における話し合い活動により解決方法を決めること」については、「学校質問紙調査」の該当する質問項目では、特に学級活動に関する取組は小・中学校ともに高い割合で「取り組んでいる」と回答しているのに対して、児童生徒の回答はいずれも、小学校が60%台、中学校が70%前後となっており、学校質問紙の回答よりも低い数値をしめしておりました。

総合的な学習の時間では、横断的・総合的な学習を通して探求的な課題解決する力を育成し、学級会活動では、学級で起きる様々な問題について、話し合い活動等を通して、自主的、実践的に解決する力を育成することを目的としています。これらはともに、授業構築の基礎・基本に立ち返り、「主体的・対話的で深い学びの視点」をもって、児童生徒の探求心や課題解決力の伸長につながるような授業改善を学校・学年全体で取り組むことが必要です。その際、学級やグループによる話し合い活動を主とした言語活動の機会を多く取り入れることで、本報告で挙げている「自分の思いや考えを表現すること」や「他者に説明する場面を意図的に設けること」などの諸課題に対して、児童生徒の課題解決力の育成が効果的・発展的に図れるものと考えます。

⑥学習に対する興味・関心や授業の理解度等

質問項目	小学校		中学校	
	藤沢市	全国	藤沢市	全国
国語の勉強が好き	55.6%	59.2%	58.5%	61.9%
国語の勉強は大切だ	92.7%	93.3%	92.6%	93.2%
国語の授業で学習したことは将来役に立つ	90.4%	91.8%	89.4%	89.7%
算数・数学の勉強が好き	61.2%	62.5%	54.8%	58.1%
算数・数学の勉強は大切だ	93.7%	94.2%	80.7%	86.6%
算数・数学の授業で学習したことは将来役に立つ	92.2%	93.3%	67.2%	76.5%
理科の勉強が好き	76.2%	79.7%	60.3%	66.4%
理科の勉強は大切だ	83.0%	86.5%	72.5%	76.8%
理科の授業で学習したことは将来役に立つ	71.1%	77.2%	57.2%	61.5%

「国語の勉強は大切だ」と考える児童生徒は90%を超え、「算数・数学の勉強は大切だ」については90%前後の割合となっています。「理科の勉強は大切だ」と考える児童は83.0%、生徒は72.5%となっており、国語、算数・数学と比べると、やや低い数値となりました。この傾向は「学習したことは将来役に立つ」の質問においても同様です。

しかしその反面、教科学習を「好き」と答える児童生徒の割合は理科が国語、算数・数学よりも上回っています。児童生徒の自然の物事・現象に対する興味関心を一層高め、科学的な考え方や探求心は生活の中でも大切であることを実感できるような授業展開とすることが必要です。

また、国語、算数・数学について「好き」と回答する児童生徒の割合が55%前後にとどまっていることから、児童生徒が国語、算数・数学等、教科学習を好きと感じ、意欲をもって学習に臨めるような授業の改善が必要です。

7 今後の教育活動に向けて

全国的に始まった GIGA スクール構想は、児童生徒に対する 1 人 1 台端末の整備が完了したことで、文部科学省は効果的な活用によるデータのフル活用ができるようにするといった、次の段階に進むとしています。

また、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善は、継続的に一層の取組が期待されます。

一方で、新型コロナウイルス感染拡大防止の影響は残っており、行事をはじめ学習活動の制限が余儀なくされ、各校の創意工夫が必要不可欠であることは否めません。

このような背景の中、児童生徒の確かな学力を適切でより効果的に育むため、学校長の指揮・監督のもと、ミドルリーダーを中心に、教職員同士が児童生徒の学力等について共通理解を図り、意欲的に校内研究、授業構築に取り組むことが必要です。

また同時に、小・中学校合同の研修や教職員どうしの交流の活性化を図り、9年間を見通した教育連携の充実を図ることや、家庭や地域に協力依頼し、協働して教育活動を進めることが児童生徒の学力向上のうえで大切となります。

(1) 教育委員会における今後の取組

ア 今年度の全国学力・学習状況調査の結果について、校長会等で各学校に周知します。また、教育委員会のホームページで公開し、広く保護者・市民の皆様へも情報提供します。

イ 本市の児童生徒は、自分の考えを書くことや説明することについて、課題が見られることから、思考力・判断力・表現力等に係る力の育成を意識した授業改善の工夫や取り組みの必要性を学校に対して働きかけます。

ウ 学習指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」への授業改善の視点をもとに、児童生徒一人一人の資質・能力の向上を図るための「わかる授業づくり」に向け、指導主事が各学校への計画訪問や要請訪問を通して、指導・助言を行います。

エ 教育文化センターを中心に、授業における指導方法の改善を目指した研修講座や「教科・領域」研修講座、学習活動における ICT の効果的な活用に関する研修講座の開催や小・中教職員どうしが連携・交流を図ることのできる研究・研修の充実などにより、教員のスキルアップを図ります。

オ 基本的な生活習慣と学習習慣は、一体となるもので、共に定着させることを目指す必要があります。そのために、学校が児童生徒一人一人の生活習慣の定着の維持や学習習慣の確立を保護者と連携して取り組めるよう、学校に対して働きかけます。

(2) 学校教育における今後の取組

学校は、次の内容をもとに、これまでの教育活動の成果と課題等を確認して、今後の児童生徒に対して、よりよい教育活動を学校全体で取り組む必要があります。

ア 全国学力・学習状況調査の結果を分析し、学校全体で結果を共有することが必要です。その際、学年会、教科会等において、児童生徒の課題となる点を話し合い、チームで授業改善を行い、指導計画等に反映させることが重要です。

イ 児童生徒への質問紙調査の結果から、「人の役に立ちたい」という意欲を持つ児童生徒の割合が高いのに対して、「自分には良いところがある」と回答した割合は、やや低い傾向にあります。「他人の役に立った、喜んでもらった」といった自己有用感の獲得には「異年齢集団による交流」が効果的だと言われています。授業等をはじめ、クラブ活動や部活動による交流や委員会活動等、児童生徒の「人の役に立ちたい」という意欲のさらなる向上を目指すための活動を増やしたり、言葉かけをしたりすることを継続的に取り組むことが大切です。

また、「難しいことでも失敗を恐れず挑戦する」前向きな姿勢は、周囲の励ましや協力により高められます。安易には解決できないような課題設定をするとともに、肯定的、協力的な集団、学級づくりを進めることが挑戦心を育むためには必要です。

ウ 教科学習を大切だと考える児童生徒の割合が高い数値であったことに対して、教科学習が「好き」と回答した割合は比較して低い結果となりました。すべての児童生徒が好きと感じ、意欲をもって学習に臨めるような授業の改善を心掛けましょう。また、読書は「国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つだ」と言われています。課題とされている、語彙力、表現力にもつながります。学年に応じた適切な読書指導が必要です。

エ 児童生徒への質問紙調査の「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取り組み状況」に係る各質問の回答から、これまでの取り組みの成果が表れていることがわかりました。一方で、「総合的な学習の時間」や「学級会活動」における課題への取り組みや問題解決に向けた話し合い活動に関しては、授業構築について振り返る必要があることがわかりました。どの教科・領域等においても、児童生徒が主体的に学習に参加し、話し合い等の対話を通して、自分の考えを広げたり深めたりすることで課題解決力の育成が期待できる授業づくりを、児童生徒の視点に立って進めることが大切です。

オ 児童生徒への質問紙調査においては、「学習の中でコンピュータなどの ICT 機器を使うのは勉強に役立つ」という回答の割合は高く、ICT の学習における活用は期待されていることがうかがえます。今後も、授業や児童生徒が学習用タブレットを家庭に持ち帰った際により効果的、効率的な活用方法について、校内研究や研修会等を設け、校内のどの教師も一定のスキルを持ち実践できるように努めることが大切です。

カ 児童生徒一人一人が自分にあった学習方法を見つけ、自分で計画して学習を進められるよう、学習の手立て（学習の方法）を指導する必要があります。また、児童生徒の携帯電話、スマートフォンやパソコンによる SNS 等の利用状況をはじめ、基本的な生活習慣の実態把握に努め、生活習慣の定着の維持や改善、学習習慣の確立に向けて、児童生徒一人一人に働きかけることが大切です。

(3) 保護者に向けて

保護者の皆様へ

児童生徒質問紙の内容から、学習習慣や生活習慣についてご家庭においてお考えいただきたいことが見えてきました。お子様と話し合う時間をとっていただき、日々の生活を見直してくださるようお願いいたします。

○ 学習習慣について

学力向上のためには、学校での学習とともに、家庭での学習が大切です。家庭学習には、教科書を基にした学校の予習や復習が、学校での学習につながり効果的です。お子様が自分にあった方法で主体的に学習に取り組めるよう、励ましの声かけをしてあげてください。

また、宿題などの家庭学習や休校措置等が取られた際に、お子様が学校より支給された学習用タブレットを持ち帰り、学習に取り組むことがあります。例えば、家庭学習や宿題、学校との通信等を行うために、ご家庭で学習用タブレットを使用することについて学校より依頼がありましたら、使用する時間帯や使用時間等、お子様が適切に使用できるようご協力をお願いします。

なお、お子様の家庭学習の取り組みについてご不明な点や不安な点がございましたら、学校や学級担任にご相談ください。

○ 生活習慣について

調査の結果、朝食の摂取率、就寝・起床の時刻については、以前の調査結果とほぼ変わらず、おおむね身に付いていることがわかりました。

一方で、放課後の時間の使い方について、テレビの視聴、ゲームやスマートフォンの使用にあてる時間が長いお子様が依然として多く見られます。家庭での時間の使い方について、話し合ってくださいますようお願いいたします。

また、お子様が住む地域の生活が送れるように、地域の行事への参加を促すなど、ご協力をお願いします。